

## 特別講演2 (16:40~17:40)

### 「学部横断型教育『21世紀プログラム』と多面的評価への指針」

九州大学 基幹教育院 教授 林 篤裕

今、大学入試は大きな変革期を迎えている。昨年12月に提出された中央教育審議会答申と、それを受けて1月に発表された高大接続改革実行プランでは、従来型の知識を問うことに重きを置いた試験方法から脱却し、それらの活用を通じた多面的評価として「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」の測定・選抜を求めている。個別大学で実施される入学者選抜試験においてもこれらの能力を「公正」に評価して選抜する必要がある、これまで以上に工夫を要した準備が各大学において必要になるであろう。

国立大学でAO入試を最初に導入した九州大学(他には東北大学と筑波大学)は、既に16年にわたって筆記試験以外の方法も用いた選抜を実施してきた。中でもその選抜方法が特徴的である21世紀プログラムは、中教審答申を検討する場となっていた高大接続特別部会においてその選抜方法や評価手法を紹介し、今回の議論の参考にしていただいた。この試験は、第1次選抜の書類審査にはじまり、講義・レポート、グループ討論、小論文、個人面接と、第2次試験だけでも延べで13時間(2日間)をかけた選抜方法を用いており、今回示された多面的評価に挙げられている能力の一部を測定していると考えている。

その名称が示す通り、2001年から募集を開始した21世紀プログラム(募集人員26名)は「専門性の高いゼネラリスト」をキーコンセプトに「創造を引き出す知識と基礎的な知識」や「外に開かれた知識」の理念のもと「21世紀を担う人材育成」を目標に学部横断型教育を行っている。従来の大学教育が学部・学科単位の教育システムであったのに対して、本プログラムに所属する学生は自分の興味・関心に応じて全11学部の講義を各自で取捨選択して履修し、卒業要件とする。入学者数(定員2,555名)に占める学生数は1%未満であるにも関わらず彼らの学内だけでなく学外での活動は他の学生にも相互に良い影響を与えており、大学全体として活力ある学生を育成する環境の醸成に貢献している。

そこで本講演では、まず21世紀プログラムについて学部横断型教育の内容やその理念、運営形態を説明した後、近年注目いただいている入試形態について試験内容のみならずその実施体制や評価方法についても紹介させていただくことにした。今後各大学で導入が進められていく多面的評価を組み込んだ新しい入試を検討される際の参考になれば幸いである。